

⑨ 米村幹之進さん

【入信の道程】

53

米村幹之進氏

山口県殿居の見竜寺で布教しているとき、ご示談をして欲しいと頼まれたので、聖人の三願転入を黒板に書いて話を進め、第十九願の行者は観無量寿経に説いてあり、法が自力で機が自力、第二十願の行者は阿弥陀経に説いてあり、法が他力で機が自力、第十八願の行者は大無量寿経に説いてあって、法が他力で機が他力、この三段階で私たちの自力の機執を浄尽してください。さるのだ。自惚れ強い人間は第二十願の法の他力の名号に眼がついて、ありがたくなったらもう助かったものと思つて信後の真似ばかりしているので、機の方を抜きにして聞いているのだから機執のあることも知らない、その機執が除かれることが難中の難です。

第十九願の行者を邪見の行者といい、第二十願の行者を傲慢の行者というのです。第十九願の人は法の不思議さのわからない人、すなわち仏智の不思議は、善も欲しからず悪も恐れなしと善悪を超越した世界があるといったとき、そんなはずがないと耳に入らないのを邪見の行者というのです。第二十願の人は機の醜悪さのわからない人、すなわち自分は素直に聞いていると自惚れているので、下根下劣の悪性で逆謗の屍が自分であることに気のつかない人を傲慢の行者というのです。

法の不思議さのわからない邪見の人は第十九願の桁にいる人であり、機の絶対の悪性のわからない傲慢の人は第二十願の桁にいる人ですから、この二人を「邪見傲慢の悪衆生は信樂を受持すること甚だもつてし、難中の難、これに過ぎたるはなし」と意見されたのであるけれども、自分が叱られているのだという自覚はなく、はいの返事も向こうからと信後の真似をしているのだから、実地の求道をしていないのだから実際に救われた体験の人がいないのです。その証拠には難信の法を語る人が一人もいないのだから真宗の極意を得た人が一人もいないことになるのです。実地の軌道に乗らなくては目的地に到達するはずがありません。ご教化の文句をありがたがっているだけで、自分の実機に驚いて求道した人がいないのですから、法を眺めて

いるだけで、仏凡一体になつていないから、実機は平気で流転をつづけて無量永劫浮かぶ瀬がないのです。

そのとき米村同行は第一の世話人でしたが、そんな難しい法ではないと小さい声でいきましたので、ちよつと便所にゆき、坊守さんに「米村さんの信仰を崩してもよいですか」「はい、少し自惚れているから崩してやってください」

黒板の前にかえつて「米村さん、あなたはよい同行ですね、よく聞きぬかれた妙好人ですね」「いやそんなことはありませんよ」「しかし玉に瑕といえますか、ちよつと足りないところがありますね」「どこですか」「私が言わなくてもあなたは気づいておられるはずですよ」「いやわかりませんから教えてください」「私は言いますまい」「教えてくださいさるのが僧侶の役目ではありませんか」「そんなにいわるのなら言いましょう。百の石で立派な石垣が完成しているのですが、一番上の石が横に向いているのならすぐ直せますが、一番下の根石が横に向いていますので、水の少ないときは平気ですが、梅雨になつて大水が出たときは、石の裏を洗うから石垣が崩れますよ」「それは何の意味ですか」「ご教化の上手下手の上の石ならいつでも向きが替えられるが、真宗の極意の信の一念が抜けているので、臨終の関所では信仰が総崩れするのです」「だれでも信の一念のときはわからないといえますよ」

「わからない人がいうからわからないのです。わからない人がいる以上は、わかる人がいるということを知らなければなりません」

「一念のときがどうしてわかりますか」

「一念のときしか知らないのです。観念の一念、称名の一念、事究竟の一念、この三つは聖人様が使用しておられないが、時尅の一念と信相の一念は使用しておられます。時尅の一念の中に、実時と仮時とがあるのです。

実時は分とか秒とかにかからぬ早業ですから、実時はわかりません。が白洲に引出され、お倉米を盗んだ罪により切腹を仰せつけるところ、君のおけにより罪を赦して知行を増してやれとおぞとこえたなりで、晴れて大安心しているではありません

んか。罪を赦していただいただけでも大事ですが、知行を増してやれとのお言葉が届いたときに、安心できたかできないか吉右衛門にわかりませんか、わからないのはその境地に立っていないからではありませんか、時間に何の用事があるのです、それなら時間は全然わからないかといえ、実時はわかりませんが仮時ならわかります。白洲に引出されているときの、切腹か打首か晒首か、不安一杯で苦しんでいたものが、勅命が届いたときの日本晴れの大満足、大安心、あのときであったかの仮時が判らなければ馬鹿です。一大事の後生といっているが、ほんとうに後生が苦になって寝食忘れて求道した人がいたのでしょうか、いつとはなしに頂いたというのは調熟の光明の分際で、墮ちるものをお助けと話がわかったただだから話だけではないですか。話と体験とは天地の違いのあることは、実地に通らない人にはわからないのです。地獄一定の罪が赦されただけでも大事ですが、五十二段を超証さしていただく約束ができたとき、晴れたか晴れないかわからないようなことで安心ができませんか、あなたの後生が苦になって泣き崩れていたとき、あの知識の教化によって、帰命の一念発得したとき、晴れないで悩んでいたとき、仏智が満入して晴れたときとの水際が鮮やかに諦得できたので、これを信前信後の角目ともいいます。この一念を突破しない人は、いくら智者でも学者でも逆蜻蛉になったところではわかりませんがありません。三途めがけて飛込む逆謗の屍が地獄を遁れただけでも大変ですが、五十二段を超証さしていただく約束ができたかできぬかわからぬ信仰では撰取されていないのです。

聖人は、

曠劫多生のあいだにも

出離の強縁しらざりき

本師源空いままさずば

このたびむなしくすぎなまし

と大慶喜しておられるではありませんか」

「そんな判然したことが凡夫にあるものか」

「凡夫にはありません。正定聚の菩薩の約束のできた人のみあるのです。その大安心をした相を信心二心なきが故に一念という、と信相を顕しておらるるのです。」

一念を説ききらないのは体験がないからです。法のありがたさに眼をつけて喜んでいるのはみな二十願の法頓根漸の相です。ほんとうに苦が抜けたか、晴れたか、満足ができたかと自分の機を突いてみると、二十年聞いても三十年聞いても、話を聞いて喜んでいただけで助かってはいないので、だから臨終の大水のときは、喜びは押流されて逆謗の屍だけが残るのです、今まで喜んだのは机上の空論、観念の遊戯にすぎません。この逆謗の屍があなたの実機で、今まで見せていたことのない流転の実機です。それと一体になろうと十劫已来立ちとおしておらるるのに、あなたはこの機に用事はない、見ては手間がかかると包んでいたのですから、一体になる時期がなかったのです。

この逆謗の屍が見えたとき、必死の求道になるのです。身体の臨終では、やり損なったとき取り返しがつかないから、平生のとき、心の臨終で聞けということです。それが体失往生の身命終と不体失往生のとの相違点になってくるのです。永年名号に向いてありがたがっていたのに、機を見よといえばみな異安心のように思っています、絶対の機と絶対のところが一体になつたうえから見ますと、機を見るな機をみるなど包んでありがたがっているのは、まるで幼稚園程度の安心で、わたしからみれば無帰命安心、無安心に見えます。あなたぐらい聞いた人なら一念の味もすぐにわかりますよ」と油を注いでおいた。

下関まで参詣してきた。夕食後一杯飲んで話にきたので「人は一大事の後生とて寢食を忘れて求道するの、ほろ酔い機嫌とはめでたいですね」といったら真っ赤になった。

その後一、二年経って「先生はすぐにわかると言われましたが、聞けば聞くほど難しくなってきました」「これからが難中の難ですよ」

「山を崩せといわるるのなら、今日はこれだけ仕事が多かったとわかるけれども、形がないのだから、のれんに腕押しでなん

ともなれない」というから「色もなければ形もない宇宙の真理を、色もなければ形もない不実一杯の悪性が、見たよりも握ったよりもはつきり諦得するのだから極難の信といわれたのですよ。その実地をとおらずに、はいの返事も向こうからとは、のんきな聞き方をしているので、他力でもなんでも無い無力でしようが」

駅まで見送りに来て「こんど逢うまでには生命がけでやります」と別れて家に帰ったら客があった。魚を料理していたら腹痛、診察の結果盲腸、下関まで運ばれたときは手遅れ、親族の竹本同行（後に出る竹本リツ姉）が必死の示談、死の直前にいるよりも信仰の煩悶の方が苦しかった由、ついにすべてがつかたとき、すべてを無条件で撰取していただいたときの大慶喜、こんな世界があらうとは、和上さんよう崩してくださった、知識から捨てられて、阿弥陀様から拾われたと大喜び、家内に向いて、おまえは再婚してもよいが、後生の解決だけは急いで求めなければならぬぞといって大往生された。